

---

# 家庭内戦争

桜井莉沙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家庭内戦争

### 【Nコード】

N2154B

### 【作者名】

桜井莉沙

### 【あらすじ】

これは、斉藤恵実の壮絶な、家庭内戦争の物語である。

## プロローグ

ここに勤めて早10年。  
いろんなことあったな。

『編集長』

ここに座るのは1日目か……。ジャーナリストは同僚も敵。外に出ても敵だらけだからな。

この先も苦労しそうだ。うーん。  
でも昇進おめでとう!!自分!!

こんなことを思ってた私のところに昨日まで同じ立場だったこの敵だらけの世界のなかで唯一の親友、宇野 陽子がやってきて、

「うっわー！ほんとに編集長のところにいるっ！昨日まで私の隣でカチャカチャと来月の企画を打ってた人が！ね。戸辺編集長！」

「嫌みにしか聞こえない……。」

「まあ一応嫌み。だって、上になったからってだけで「これ、こうですか？」とか玲に言いたくないもん！なんか…違和感が…。」

「私に「これ、こうですか？」とか言ってる自分を想像したら気持ち悪いと言いたいわけだ？」まあ。自分もちよっと違和感があるんだけどね。

「うん。それだけ。だって私は別に上に行こーとか思ってないもん。だから玲が上に上がったことは、なんとも思わん。」

「そっか。」でしようね。

「あ。で、今日バイトの子が来るのよ。1階のフロアで待たせてるの。昨日まで編集長だった大泉編集長に「バイトを会社までつれて来い！」って言われてたから。『連れて来たら、あとは戸辺がどうにかする!』って。なのでバイトをフロアから、ここまで案内するのは編集長の役目だから。では、いってらっしや〜い!」

「ハイハイ。」

キイ。  
椅子から渋々立ち上がると私たちが働く4階の編集室を出た。

私の働く会社はビルで1階にはカフェやロビーなどあって、のびのびしている。アルバイトの方にとってはとってもいい空間だ。1階だけだが。あとの所は最上階以外ほぼうるさい。

エレベーターが、『1階です。』と言ったと同時に目の前の戸が開いたので出てそれらしき人を自慢の視力2.5で探した。約2秒であっさり見つかってしまった。

そのバイトはキョロキョロしていて『わー!』って周りの人などに自分が圧倒された感じの女性だった。私より10は若いだろう。本当に10ピツタリ違ってたら、あの子20ちょうどか…。若いねん。自分ももう30。来年には31。…ってなんでこんなことを。

気を取り直した私はそのバイトっぽい子に話しかけた。

「宇野に連れてこられたバイトさん？」

「はい！これ履歴書です！」

そう言っつて履歴書を見せられた。

…椎名美羽。ふーん。短大出てんのか。

と名前と学歴をちよちよいと見て、

「じゃあ椎名さん。案内するから。」

と、言っつてさつき乗ったエレベータに今度は2人で乗った。

『4階です』と、また戸が開いた。それと同時に電話の音。コピー機の音。

バイトさんは「なるほど！大手の出版社はこれほどまでに騒がしいのか！」と思っつたことだろう。やっぱりちよつとびっくりしていた。私も10年前は同じように驚いた。

戸をあけて中に入った。彼女のこれから使うことになる昨日まで私  
が使っていたデスクのところに案内した。このデスクは昨日、私  
が約1時間かけて荷物を編集長の所に移動。整理。片付けをしたデ  
スクなのだ。

「ここが今日からあなたのデスク。困ったことがあったら、となり  
の宇野に聞いて。」

「はい。分かりました。」

「よろしくね。」陽子…。あんたは相変わらず後輩には優しい。  
下は妹みたいで、かわいいのだろう。

心の中で思った。

「あの、「バイトが口を開いた。聞きながら陽子にバイトの履歴書  
を渡した。」

「なに？」陽子はすかさず聞き返した。

「あの人、なんか避けられてるように見えるけど何ですか？」

バイトは、斉藤 恵実を指差して言った。

「あー。あの人はね。斉藤恵実って人で親に相当やばいことされて、  
その復讐に親の記事を書いて親を刑務所送りにしたらしいよ。ここ  
じゃあ有名でみんな人間じゃないって言ってるの。」陽子の言っ  
てことは噂だ。でも、その噂は嘘のこともあるし本当のこともある。  
私は、本当のことをすべて知っている。私は誰にも言っていないが、  
ってゆうか言えないが斉藤さんには共感できる部分は多々ある。

その斉藤さんの人生を変えたであろうことを私は知っている。

そう。あれは半年前のことだ。

## プロローグ（後書き）

では、人物設定を紹介します。

斉藤<sup>サイトウ</sup> 恵実<sup>メグミ</sup>（女・28才）

主人公。プロローグはちょっとしか出てないです。

戸辺<sup>トベ</sup> 玲<sup>レイ</sup>（女・30才）

編集長に昇進した普通のジャーナリスト。視力2・5。

宇野<sup>ウノ</sup> 陽子<sup>ヨウコ</sup>（女・30才）

玲の唯一の親友。後輩にはわかりやすいぐらい、優しい。

大泉<sup>オオイズミ</sup> 洋介<sup>ヨウスケ</sup>（男・48）

前の編集長。自分が今まで作っていた人気雑誌の編集長の座を部下の玲に譲った。

その後、ほかの雑誌の編集長にいたらしい。

椎名<sup>シイナ</sup>美羽<sup>ミウ</sup>（女・21才）

短大卒業。社会人1年生。バイト。玲が、編集長になった1日目に来たバイト。

って感じですよ。

これは、フィクションです！（一応）

## 第1話

斉藤恵実。

現在、彼女は同僚や部下、先輩たちにも恐れられている。彼女は昔は明るい女性だった。私と同じぐらいに。

あれは、3年前の夏のことだ。

私はあの日も『来月の企画を早く書かねば!』と焦っていた。そんな頃だ。斉藤恵実が私も働いているこの人気雑誌の編集室にめでたく移動となったのは。

「えー。今日からここに移動になった斉藤恵実さんです。大泉編集長が朝9時ごろに皆の前でそう言った。」

隣の斉藤 恵実という女は大泉編集長がそう言うと、「斉藤恵実です。『スポット!』の編集室から移動になりました。この度、この1番人気のある『芸能ポスト』の編集室に移動になってうれしく思います。よろしくお願いします。」  
そう彼女が言い終わった後、またいつもの騒がしい空気にこの編集室は包まれた。

… スポット…。 あー!うちの会社のスポーツ雑誌で4、5番目に売れてる雑誌か!

… っていうかウチの雑誌、一番売れてんだ!初めて知った!

「よろしくお願いします。」

話しかけてきたのは斉藤恵実だった。昨日まで空いていたデスクは彼女が座るためだったことが今、分かった。斉藤恵実は育ちがいいのか、あのベビードールの香りがした。私はこの香水の匂いに関し

ては分かるのだ。何故かは1回使ったから。ただそれだけ。

「あー。よろしく。」

私はそう言っとパソコンに向かって企画書のうち始めた。

お昼12時ごろ。締め切りギリギリの企画書がやっと仕上がったのでゆつくり1階のカフェで、昼ご飯でも食べようと編集室を出た。

「あのお昼ですか？」

背中から声が聞こえたので振り返った。斉藤恵実だった。

「そうよ。」

「一緒に食べてくれませんか？」

「いいけど。」

こんなことで私は斉藤恵実とご飯を食べることになった。

私はシーチキンパスタを食べながら聞いた。

「斉藤さんって親何やってんの？」

「え？」

「あ。いやね。朝、話しかけられたときベビードールの香水の匂いしたから。」

私は、後輩には陽子と違って失礼もクソもない人間なのだ。いじめはしないですが。

「あ。これは貰い物です。何で分かるんです？」

「1回使ったから。それだけ。ところで何やってんの？親？」

「政治家です…。」

「ふ〜ん。…ってすごいじゃん！で誰?!」私は少々ビックリ気味で聞いた。

「斉藤隆二です。」

「ふ〜ん。…ってマジで?!」

「は…はい。」斉藤恵実はどんどん困っていく。

ところで斉藤隆二って言ったら、かなり有名な政治家さんだ。

ちなみに民主党に入っている。

これが私と斉藤恵実の出会いだった。斉藤恵実はこの業界に入っ  
たことによつて後に斉藤恵実の運命そして斉藤恵実の父の運命も変  
えることになるとはまだ思つてもみなかったことだろう。

## 第1話（後書き）

1話（今回）の、追加の人物紹介です。  
サイトウ リュウジ  
斎藤隆二

恵実の父親。政治家。

## 第2話

「今回の企画…?」

思いつかへん…。

斉藤恵実と昼ごはんを食べて1時間が経った。さつき企画仕上げたと思つたら、また考えなければならぬ。

斉藤恵実は私のアシスタントになったらいい。『なんで斉藤さんが私のアシスタントに付くんですか?』って大泉編集長に聞いたたら『席が隣だから。戸辺アシスタントが付くという事は指導係にもなったことにもなるから。斉藤の指導係、戸辺に任命!』と言われてしまった。最悪だ。

よって今、私の隣には斉藤恵実が座っている。

指導係になるということは2人分の仕事をするようなものだ。

ここの芸能ポストの編集部は変わっていて新人にもバイトでなければ仕事をさせる。

要するに企画を書かせて面白かった場合、それに相応しい要するにトップページに載せてくれたりと上手くいけばいきなり連載企画を書かせてくれたりする。

急速に昇格したいという人にとってはもって来い!の編集部なのだ。

しかし指導係に任命されてすでに連載企画も持っていて、そこそこ忙しい人にとっては指導係というのは絶対に回ってきて欲しくない係なのである。

だって、指導係になったら自分の会議、打ち合わせにも取材にも新人が自分の後を付いて回って新人に「これ、どういう意味なんですか?」と聞かれた場合、たぶん専門用語も分からないであろうから

1日に30回の質問はされる。そして、もちろんその質問すべてに答えなければいけない。

おまけに、新人に締め切りまでに企画書も書かせなければならぬのでその書き方を教えたり締め切りまでに出すように監視、指導をしなければならぬ。

要するに指導係は2人分の仕事をするようなものなのだ。

プラス面はコピーなどの雑用は新人がしてくれるのでそれらの雑用がなくなるというぐらいの事だ。

私は早速その雑用を斉藤に頼むことにした。

「斉藤。あなた、これから斉藤ね。」一応あだ名を決めよう。って言っても苗字だが。

「はい。」

「で編集部の端から端まであの手紙カゴ持ちながら散歩して来な。」私は小さい段ボール箱、通称手紙カゴを指差して言った。

「どうゆう意味ですか？」

「伝言を集めて来いってこと。新人の仕事だから。今、一番新しいの斉藤だから。『早く来ーい！』って、そこら辺のむさ苦しいおっさんに言われる前に行って来たら？それと、私以外の伝言を預かったら、その受取人に渡す。私が受取人の伝言を預かったらその箱に入れて1周回したら手紙カゴを持ってきて。」

「はい。」

斉藤は返事をするたびに手紙カゴを持って編集部の散歩を始めた。むさ苦しいおっさんに注意を受けるのはよっぽど嫌なのだろう。

この頃の斉藤はまだ純粹だった。

でも斉藤が『親を刑務所送りにした。』と言われるきっかけになつたあの事件の幕はもうすぐ上がるうとしていた。

### 第3話

「伝言預かってきました。」

斎藤はそう言つて手紙カゴを私に渡した。

私は中身をバサツ！と全部取り出すとカゴを斎藤に返した。

「元の場所に戻してきて。それと1日に朝10時ぐらいに1回、午後2時ぐらいに1回は絶対に回つたといた方がいいよ。文句言われるから。」

「はい。」

「じゃあ今日は会議とか無いから今から今月の企画を考える。うちの雑誌はニュースとか、そういう系を取り扱つてるからまず新聞を見る。」

そう言つて、私は今朝の読売新聞を斎藤に1つ渡した。この新聞は会社の1階にある来客用の新聞なのだが誰も見ないので、掃除のおばちゃんに「これ、くれる？」と聞いたら「ああ。いいよ。」と言つて簡単にくれる。

そんな感じで今日は斎藤の分と自分の分、計2つを貰つてきた。

「大阪府、知事選挙……。あ。これいいかも！……。あー。でも、この日は関口未来と高坂竜也の婚約会見があるんだ！今月はこの2大ニュースだろうなー。ねえ。斎藤、大阪府の知事選挙の記事、書いてみない？私、女優の関口未来の婚約会見行けるの私だけだから。書かなきゃなんないのよ。どうする？」

「んー。よく分かんないです。」斎藤はそう言った。

「大きいニュース取らないと元に戻されるし斎藤の今の指導係は私なの。あなたが業績を今、上げたつて私にプラス利益はないけど、もし斎藤が今月の出さなかつたりしたら私は、あのむさ苦しいおっさんに怒られるのよ。だから、それがイヤなら今月の大きいの一人で探しなさい。」

「無茶ですよ……。」

「私かなぜ、ここまで言うかというと、企画出すまでの締め切りまで、あと18日しかないの。この期間から、さほど大きくないニュースを取り上げ、企画にするのは文章を普通より読者が引きつくようなのを書かなければならない。それは新人にとっては高度な技で、最低でも今までの経験上、編集長が『OK!』と言つまで新人の場合25日はかかる。要はもう時間がないのよ。」

「分かりました！やります。」

「でも何でいやそうにしたの？」

「これうちの親も出るんです。」

「あー。政治家さんだったんだ。それでも取材はするよ。新人が取材なしで企画なんて上げて提出しても相手にしてくれない。『なめてんのかー!』って、もう一回書くハメになる。」

「戸辺さんは2回出したことってあるんですか？」

「2回ね。1回目は新人時代、取材なしで書いて失敗。2回目は大きくないネタで失敗。」

「そうですか。」

「取材は1人だよ。だから自由に自由な時間にやっていいよ。取材が嫌なら尾行して1日の生活拝見とか。どっちでもカメラは使用。本人を写しとくんだよ。そしてこの場合、主要のあなたのお父さん、瀬戸 遼介どちらかの取材だね。まあがんばれ。」

この時、小さなニュースを扱って、わざと元に戻されたほうが斉藤にとつてはよかつたのかもしれない。

その方がいい夢を永遠に見ることが可能だったかもしれないから。

純粋な斉藤のままだったと思うから。

### 第3話（後書き）

瀬戸 遼介 セト リョウスケ

大阪府、知事選挙に立候補した政治家。 斉藤隆二の敵にあたる人物。

#### 第4話（斉藤恵実が見たもの）

私、ジャーナリストになってもう1年経つのだが、ようやくウチの社のトップ雑誌の編集部に移動になった斉藤です。

最近、戸辺さんが私の指導係になって何にイラだってるのか分かんないけど怖いです。

今日は1日尾行です。父の尾行です。やっぱり身近な人が安心なだけで、でも父に『取材させてください。』と言う度胸は私には無かったので1日尾行をすることにしました。

今は午前9時。普通に選挙カーで『斉藤隆二です。』と演説って言うの？

それをしていた。私はタクシーで後を追った。写真は15、6枚撮った。

午後2時。それが終わるとカフェに入っていた。私もバレないように入った。

何か会話をしていた。

私は盗聴器を、近くを通る際に父たちが座っている近くにあった観葉植物に分からぬよう、忍ばせた。

「でさー。奥野さん、このお金で選挙の票をチヨイチヨイとイジツテくれない？」

そうやって父は黒い旅行カバンを机の上へ上げチャックをジッと少しだけ開けて奥野と言う人に中身を見せた。私は中身を見ることにして遠くの席から、ちよつとだけ体をずらし見てみた。

「……！」

大声を出してはいけないと思ひ息を飲み込んだ。

私が見たのは、たぶん1000万はある札束だった。  
なんであんなものが？！

あちらでは奥野さんが物を確認して、

「こつちだつて、命がけでやってるんだから。バレたら間違いなく俺たちサツ行きなんですから。そんな簡単に言わないでくださいよ。」

「やってくれないか？」

「やりますよ。」

そういつて奥野と言う人は黒いバックを手にとってカフェから出て行った。

それを見送った父もカフェから出て行った。

なんなんだろう？選挙の票をイジル？サツ？意味が分かんない？そもそも、その言葉の意味が分からないと。後戸辺さんに聞こう。

そう思い、尾行のため、私もカフェを後にした。

**第4話（斉藤恵実が見たもの）（後書き）**

追加人物設定。

奥野 一志（オクノ ヒトシ）

恵実の父と、会話していた怪しい人。

恵実の父とどんな関係があるのか、分からない。

## 第5話

「戸辺さん！尾行してきました！」

朝9時。斉藤は私がデスクにカバンを置いた途端に『待つてました！』って感じで私のところに向かってきた。伝言回収の途中にだ。

手紙カゴを編集部の真ん中の通路に置いたまま、私を見つけたと思つた途端に来たらしい。

「手紙カゴ、通路に置きっぱなし。とつて来な。」

「はい。」

斉藤は取つて来ると、

「あの、聞きたいことがあるんです！」

「なに？」

「昨日尾行してたら、おかしな点がいっぱいあったんです。」

「じゃあ、全部メモに書いて。」

そう言つて私はメモを渡した。

「どうしてですか？私、口で言いますよ？」

「口で言つたら周りに聞かれてネタ、盗られるよ？」

「分かりました。」

そう返事をした斉藤は私の隣の自分のデスクに座ると聞きたいことを書き始めた。

私はその間にコピーを自分の分だけ注いできた。

「これです。書けました。」

私が帰つて来たら斉藤にメモを渡された。

「分かつた。読む。」

メモの内容は斉藤は純粹だと言つことが分かるもので、同時にとてもないことが起こっていると云つことが分かつた。内容は下のとおりだ。

昨日のおかしかった斉藤隆二の行動。その会話。

斉藤隆二『でさー、奥野さん、このお金で選挙の票をチヨイチヨイとイジツテくれない？』

奥野『こつちだつて命がけでやってるんだから。バレたら間違いなく俺たちサツ行きなんですから。そんな簡単に言わないでくださいよ。』

斉藤隆二『やってくれないか？』

奥野『やりますよ。』

こんな会話をして大金の入ったカバンを斉藤隆二から奥野と言う人に渡していた。

上のとおりです。私は大金を不意に見てしまつて思わず、叫び声が出るところでした。

でも頑張つてこらえました。

ところで質問です。

『選挙の票をイジツテくれない？』とか『サツ行きなんですから。』とかどんな意味が分かりますか？

この文面からして、斉藤は事の重大さを知らない。そして純粹だ。サツ行き⇨警察に捕まる。

選挙の票をイジツテくれない？⇨選挙の自分に入っている票を本当の数より多めにしておいてくれ。ってこと。要するに詐欺。

8割の可能性でこの可能性が高い。これは、斉藤隆二はどんな手を使ってもし事になるつもりだ。斉藤にとっては人生で1番、最悪なことになることだろう。自分の父親がこんなことをしているなんて

知ったら…。

私は困った。でも斉藤のことだろうから言わなかったら言わなかったで気にしない、なんてことはまず無いだろうから、私が言わない場合、言ってもネタを盗まれる心配が無い、編集長に聞くだらう。そうだったら、もう私が言うしかないのだ。

「戸辺さん分かりませんか？分からなかったら私、編集長に…。」

「斉藤。ちよつと外に出よう。」

「何ですか？まだ出勤してから10分しか、」

「いいから！」

私たちは、会社を出て外のカフェに入った。コーヒーを2つ頼んだ。

「斉藤。斉藤が世界で1番、信用している人って誰？」

「え？」

「いいから、何も言わずに質問に答えて。」

「よく分かんないです。時と場合によりますね。」そう言って斉藤は、さつき来たコーヒーを一口飲んだ。

「父親のことは？」

「ある程度は信用しています。」

「斉藤。お願いがある。」

「何ですか？」

「さっきのメモの内容、聞きたいなら斉藤隆二を他人だと思って聞いて。」

「はい。聞かせてください。」

「斉藤隆二は、どんなことをしても知事になるつもりだ。で、選挙の票を詐欺するつもりでいる。その協力人が奥野と言う人だ。サツ行きの意味は『下手したら、警察につかまる。』ってこと。」

「…そんな…わけ…。ないです！」

そう言って、斉藤は走ってカフェを出て行った。

その日、斉藤は会社には戻って来なかった。

## 第6話（斉藤恵実が見たもの）

戸辺さんの言うには私の父は詐欺をしているらしい。今日の朝、外のカフェで話を聞いて私は思わず戸辺さんを置いてきてしまった。心配してないかな？いくら戸辺さんでもするよね？いくら冷血人間でもするよね？

でも、そんなことより詐欺が本当だったら、私どうしたらいいんだろう。

「ただいま。」

午後11時やっと父は帰ってきた。玄関に私は走った。聞けばすべてが分かる。

「お父さん。選挙どうしても当選したいの？」

「ああ。知事になりたいね。だから立候補してるんだ。」

「それは、たとえ詐欺みたいな事しても？」

「…どうゆう意味だ？」

「お父さんはそんなことしないよね？選挙の票、詐欺するなんて。」

「知っているのか？お父さんが、どんなことをしても大阪府知事になるつもりでいる事を。」

「本当なの？！だったら今すぐやめて！」

私は、叫んで父を掴んで揺すった。

「知ってるんだな？」

その声その表情、もう父の面影は無かった。

「私は、どんなことをしてもトップに立つんだ！」

異様な声で私に言った。妖怪のような声で。恐怖感で声が出なくなりそうだった。

「…でも…そんなの…本当のトップじゃないよ！」  
一頻の声で私は言った。

「いいか？結果がすべてなんだよ。表がすべてなんだよ。裏で例えどんな事をやっていても、表でバレてなきゃいいんだよ。」

「そんなの、もう人間じゃないみたいじゃない。お父さん今、悪魔みたいだよ？」

「うるさい！」

パン！

頬が痛い。ヒリヒリする。

「間違ってる！斉藤隆二のやり方は！間違ってる！」  
泣きながら、でも私は必死に言った。

ダン！

足が痛い。

ゲシツ。

おなかが痛い。背中が痛い。

でも、もう悲鳴を出す力も無い。

目覚めたらキッチンに居た。周りは血だらけだった。でも、それほど重症ではなかった。

痣が相当ある。虐待だ。

私は痣が見えないように化粧をし、服を着替え、いつもどおり出勤した。

外は、いつもと変わらない。それを感じてもものすごく、ほっとした。

でも、父はもう、父ではない。

第6話（斉藤恵実が見たもの）（後書き）

（斉藤恵実が見たもの）と言うのは恵実目線と言うことです。

## 第7話

「おはようございます。」

斉藤が来た。昨日、散々心配した。でも心配しても起こった事は変わらない。

斉藤がいつもと違う。私はすぐ分かった。

「本当だったでしょ？」

「いえ。嘘でした！」

「嘘でしょ？嘘って言うの嘘でしょ？分かった理由は目が腫れてる。テンション低いし、私より出勤が遅い。挨拶した。香水してない。いつもは目がきれいで、テンション社会人のくせして高い。私よりも早く出勤して手紙カゴ持って伝言集めてる。朝、私が出来たら挨拶の前に、仕事のことを1番に話す。いつも欠かさず香水してる。」

「そりゃ遅れることも忘れることもありますよ。」

「私は一流ジャーナリストよ。人間観察はジャーナリストの得意分野。私は、そう簡単に騙せない。ましてや、あなたみたいな新人ならなおさら。どう？嘘って言ったの嘘でしょ？」

「…はい。問い詰めたら殴られちゃいました。えへっ。笑っていいですよ？」

「…笑えないわ。あなたはどうしたい？」

「…戸辺さんならどうしますか？」

「私はね、経験豊富よ。私の親友はタレントやってたの。そして人気が出ないから、大物アーティストと結婚した。オトしたの。で、親友は浮気し放題。相手のアーティストは知らずに、私の親友を溺愛してた。のちにアーティストは浮気を目撃した。そして、アーティストからウチの編集部で電話が来た。出たのは私だった。親友が浮気してるって内容だった。要するに、復習したかったのよ。私は記事を書いた。大きくトップページに置いてもらった。そして、裁判になった。親友とアーティストが離婚するか、しないか。私はア

「アーティストに浮気の証拠をタダであげた。私は親友よりアーティストの方に味方するのが正しいと思ったから。そして、アーティストが勝って離婚。慰謝料をアーティストは請求した。だから、斉藤あなたに正しいと思ったようにしな。私はそれが正しいと思ったなら全面的に協力する！」

「…私…訴えます！その前に私の意見を書きたいです！」

「分かった！そうなるなら協力する。斉藤隆二を特集だ！タイトル『大阪府知事選挙、立候補の斉藤隆二の真実！』で行こう。」

「はい。」

こうして、戦争は始まったのです。

## 第8話

「写真、何枚ある？」

「ちよつと待つてください。今、数えます。」

「ん。」

「34枚です。」

「わかった。」

昨日の朝8時頃から、今日の朝8時、ぶつ通しで昨日から斉藤と記事を書いている。こんなに仕事に熱中したのは3年ぶりだ。

「：戸辺さん。」

「何？」

「：私たち、昨日から寝てないですよ？」

「分かってるわよ。」

「このままじゃ私たち、ダカラのCMの速水もこみち みたいになつちやいますよ！」んー。一理あるわ。

「確かに眠いね。」

「そうですね。」

「寝たら？」

「戸辺さんは？」

「朝ズバツ！見て寝る。」

「：じゃあ、おやすみなさい。」斉藤は、なんじゃこの人といった感じで私を見て編集部の端にいくとソファに寝転んだ。

ピッ。

私は編集部の端のテレビの電源をつけた。

『今日のニュースです。大阪府知事選挙まで、あと16日。斉藤隆二さんに話を聞いてきました。』ふーん。

『私はですね。この選挙に全てを賭けてます！皆さんのために私

は一生懸命頑張りたいと思います！税金を無駄遣いせず麻薬をなくし犯罪の全てを無くせるよう最善を尽くします！どうか私に投票してください。』なにが犯罪を無くすだ。自分だろ！やってんのは！ポチッ。

私は、さっきの映像を録画、ボイスレコーダーで録音をした。TV局にもらっても良いんだが、時間がかかるので、大抵は録画だ。そして、記事に使う場合、許可をもらう。これが、私流だ。

「さ。寝よ。」

私も寝むりについた。

「…さん！戸辺さん！起きてください！」

「ん？」私は渋々起きた。

「書きますよ！記事！」

「はいはい。」

こうして記事は勢いよく完成した。

## 第9話

「いよいよ今日発売だね。斉藤。」

「そうですね！で、いつもはこんな事するんですか？」

「いや！いつもは、ボーッと居る。編集部で。」

「でも、戸辺さん。私たち、かなり怪しいかもですよ？」

「いや！ぜんぜん、怪しくない！」

現在8時30分ごろ。

私たちは自分たちの書いた記事が載っている雑誌が売れるのを確認する為、近くの駅の売店に来ている。

でも、遠くからただジーッと見ているだけじゃ怪しいので、売店でチョコを買おうか、買わないかを悩んでいるような人を装いながら監視している。

周りから見れば、どっかのバンドの子がチョコを買おうか悩んでいると言った感じに見えているだろう。

サングラスかけて、チェーンとか付けて、ジーパン穿いて。どこからどう見ても今ドキの子の感じだ。

「戸辺さん。ところでこの凄いカツコウ、何のつもりですか？私『これ着る！』と言われて言われるままに着て10分こうしてますけど、未だに何のつもりか分かりません。」

「今ドキのバンドでもやってそうな感じの子。」

「…。今ドキって言うかこれ、80年代の不良って感じですよ。なんかアメリカンすぎだし、迫力あるし。」

「そう？」

「450円です。」

そんなことを言っていると、私たちの本が店から1つ旅立っていった。

「売れましたね。」

「ああ。」

そして、そのあと私たちを確認した分だけでも24冊の『芸能ポ  
スト』が旅立って行った。

あとは世間から、どんな反響が帰ってくるか。

## 第10話

斉藤隆二の悪行が書かれた雑誌が発売されて3日。まあ、書かれたじゃなくて、書いた。だよな。

もうそろそろ、反応が出る頃だろうと思い、ニュースを見ることにした。

ピッ。みのもんたが出てきた。と思ったら、アナウンサーだった。

『12月1日木曜日です。』分かっています。

『斉藤隆二議員が、詐欺をしているとの疑惑が浮上しています。文楽社の『芸能ポスト』によると、斉藤議員は、第3者に票の方を本当より多めにしておいてくれ。と頼んだらしく、第3者はそれを承諾したとのことです。未だ本当かどうかは分かってませんが、どうですか？みのさん。』やった！  
ピッ。

「斉藤。出てたよ！文楽社の『芸能ポスト』って！」

「知ってます〜！凄いですよね〜！」

プルルルルル。プルルルルル。プルルルルル。

私のところに電話だ。私は怪しまずに出た。

「はい。文楽社、芸能ポスト編集部の戸辺です。」

「アンタか！デタラメ書いたのは！」ものすごい迫力だ。と、思ったと同時にボイスレコーダーの電源を入れた。録音中と。

「あの、どちらでしょう？」

「斉藤隆二だ。戸辺 怜というのは君か？斉藤 恵実とは誰だね？出さない！」こりゃ、チャンスだ！

「名前に覚えはありませんか？あなたの娘さんですよ？」

「私の娘はそんな裏切ることはしない！」

「あなたは娘さんに暴行をしたのにはですか？よく言えたものですね

「？」

「……………とにかく…その斉藤という者に電話を代わりなさい。」

「少々お待ちください。」

私は斉藤に声をかけた。

「斉藤。斉藤議員から電話。代わって。横で聞いてたでしょ？言えるなら言って。自分が娘だ、暴行を受けた、詐欺の現場を見たこと。これを明白に言って。ボイスレコーダーに録音してるから。どうする？出る？」

「出ます！戸辺さん、お願いがあります。父を訴えること、出来ますか？私、あんなの許せません！」

「バッチシ出来る。」

「じゃあ、出ます！」

「よし！」

「もしもし。代わりました。斉藤恵実です。」

「斉藤隆二だ。今すぐ訂正しろ！どこの誰だか知らんが！今すぐ訂正しろ！」

「…。娘に、どこの誰だか知らん。ってなによ？少なくとも、声と顔と名前は知ってるでしょ？親なんだから。暴力まで振るっただから、覚えあるでしょ？痣がいつぱい。痛かった！その、暴力振るった理由は、私が奥野って人に協力してもらって、お父さんは選挙の票を本当より多目の結果にしる！って言ったらいいね。表に出てなかったらいいんだよね？でも、もう出ちゃったよ？」

「…。」

「返事にお困りのようで。では、切ります。」

ガチャ。

ピッ。

「録音完了。法律事務所の名刺…。あつた！はい。」私は斉藤に弁護士の名刺を渡した。

「かけるんですか？」

「もちろん。証拠あるっていいなよ。決定的な証拠はあるって。暴行受けたこと。詐欺してるということ。両方、訴えられるよ。でも、ここからは私は助けられない。裁判は、訴える側と訴えられる者とその弁護士の問題だから。そこに電話かけて、この証拠を全部出さな。」

「はい。ありがとうございます。」

「この件はね。」

こうして、斉藤恵実は斉藤隆二を訴えることにした。

## 第11話（斉藤恵実が見たもの）

父を訴える。

普通の人はそんなことは無いだろう。でも私の場合、そうなってしまった。見てしまった。知ってしまった。

あんなことをして平気でいる父が怖い。憎い。だから私は訴える。そして勝つ！

大野弁護士事務所

私はそこに電話をかけた。

プルルルルル。プルルルルル。

「はい。大野弁護士事務所です。」

「斉藤恵実といます。父を訴えたいんです！」

「はい。まずは事務所に来てください。そして、話を聞きましょう。」

「

「はい。ではいったん、切ります。」

「お待ちします。」

ガチャ。

こうして今、大野弁護士事務所に来ている。

キィ。

私は中に入った。

「お邪魔します。」

「…斉藤さん？」若い女の人だった。……戸辺さんに似てる。迫力が…。出来る女って感じた。

「はい。斉藤恵実です。」

「座つて。事情を聞かせてください。」私は言われるがまま、ソファに腰掛けた。

「はい。私は新人のジャーナリストです。新人はデツカイネタを手に入れられない限り、記事は載せてくれません。で、この頃、大阪府の選挙が行われるじゃないですか？私の父、斉藤隆二も出るんです。で、そのことについて記事を書こうと思ひ、取材は初めてだし、親にするのも恥ずかしいと思ひ、1日の生活を拝見する。といった形で尾行をしてたら、『選挙の票を本当より多めにしろ。』と言う父を見てしまいました。それがどうゆう意味か聞こうと思つたら、暴行されました。おまけに記事を書いて雑誌に載つたのを見て、父は私の会社に電話をかけてきました。それを本当なのに、『デタラメを書いてくれたな。訴えるぞ。』と言うし、そんなの間違つてると思ひ、父に暴行されたのと、選挙の票について訴えたいんです！証拠は、たくさんあります！」

「分かりました。がんばりましょう。」

「はい。これ証拠です！」私は、全ての証拠を入れた封筒を渡した。「分かりました。しっかり見ておきます。また明日も来て下さい。」

「はい。」

「どうか、勝ちますように。」

## 第12話

あのあと、斉藤恵実は裁判を起こし、見事に勝利を収めた。慰謝料500万をもらい、斉藤隆二は、懲役5年。

そのあと、わたしは指導係の期間が終わり、斉藤とは、もう関わってない。

あの記事を書いたあと、斉藤は『芸能ポスト』でやっていくことが確定し、

その2カ月後、私は編集長になった。

ちよつと前まで、嫌って言うぐらい斉藤の話を聞いていた。今は、ここ3カ月、話していない。最後の会話は、裁判所の前。裁判で勝ったという報告とお礼だった。

「戸辺さん。私、勝ちました。父親に裁判で。大勢の人の目の前で。父は懲役5年、私に慰謝料500万の刑でした。…今までありがとうございました。今日で指導係、終わりですよ。知ってます。戸辺さんが、指導係、嫌いな。トイレの個室で、『疲れたー。』とか、言ってるのがよく聞こえてました。これは、私が、勝手に言ってるんじゃないんです。大泉編集長からの命令です。」

「たしかに、疲れたけど、いい体験をさせてもらった。決して、悪いものではなかった。」

「そうですか。では、私は会社に戻ります。」

「うん。戻りな。」

あれから、3カ月。

斉藤は、180度変わった。完璧になつて帰ってきた。

斉藤は、私と話した後日から、1ヶ月休んだ。

1ヶ月たつて帰ってきた斉藤は、パソコンは、私の上をいくぐらいのレベルで、専門用語、礼儀、すべて敵無し。前はあんなにドジで、

質問攻め、廊下は走る。小学生レベルだった斉藤が、エリート中のエリートって感じになっていた。もう、私なんか話しかけられない！と思ってしまう。唯一、話しかけていい人をあげるとしたら、社長とか？になるんじゃないの？って感じになって帰って来た。

でも、私が斉藤の指導係だった、というのはあまり有名ではない。たぶん、あのころの斉藤は、はっきり言って目立ってなかった。だからだろう。

なんで、あそこまで変わったのだろう？もう聞けないのだろうか？

## 第13話

編集長、2日目。

只今、『芸能ポスト』の編集部は、原稿提出ラッシュだ！

みんな、締め切り！締め切り！と焦っている。私は編集長感想のコーナーをせつせと書き、

売り上げ計算、その他、印鑑押しで大忙しだ。でも、社員のみんなに比べたら、企画を持たなくていい我社の『芸能ポスト』編集長は楽だ。

「出来ました。」

企画の原稿を提出された。斉藤恵実だった。

完璧だ！

「はい。OK。」

私は印鑑を押しした。

「あのお、斉藤さん。話したいんだけど、今、時間ある？」

「はい。」

「じゃあ行こう。」

私たちは会社のカフェでコーヒーを頼んだ。

「話って何ですか？」

「単刀直入に言う！なんで、そこまで変わった？」

「なにがですか？」

「性格。風貌。仕事のランク。すべて。」

「仕事のランクが上がったら、利益が下がりますか？」そうじゃない！口も巧くなってる！

「いや。むしろ上がるけど、そうじゃなくて！変わったよ。いい意味じゃない。悪いほうに変わった気がする。」

「仕事にランクは上がった。すること全て完璧。情報を私に持たせ

たら、決して流出しない。良い方に変わった。私はそう思います。」  
「そうじゃない。仕事面では良い方に変わった。でも、個性がなくなった。以前の優しい感じの斉藤が消えてる。仕事が全てじゃないわよ。ロボットじゃないんだから、感情を持ちなさい。」

「…このほうが楽なんです。心閉ざして、他人の心に入らず、自分の心にも誰も入れない。それが、私にとって楽なんです。」

「…そんなの、独りぼっちなだけじゃん。」

「独りぼっちの方が、傷つかない。得るものもないけど、失うものもない。それがいいんです。」

「でも、逆を言っごらん？失うものもあるけど、得るものもある。」

「失うものが大きすぎました。父の裏切りがあって、暴力、父に勝利した。大きすぎます。」

「…行こう！」

私は、斉藤の手を引っぱった。

「どこに行くのですか？」

「いいからついて来なさい！」

このときの私の行動は、斉藤の心にプラスになるのか、マイナスになるのか、分かんない。

でも、聞かせたい。あの、真実を。

### 第13話（後書き）

このころ、ろくに更新できなくてスイマセン！

## 第14話（斉藤恵実が見たもの）

戸辺さんに連れてこられたのは、刑務所だった。

「戸辺怜です。こちらは付き添いの斉藤恵実です。電話で話したとおり、斉藤隆二と面接お願いします。」

「はい。案内します。ついて来てください。」

私は、戸辺さんがなにを企んでいるのか全く分からなかった。

しばらくして、警官に面接室へ案内された。

薄いガラスの向こうには、父の斉藤隆二がいた。

バン！

「コヒッ！」「」

私と父は、戸辺さんが机に手をついた音にビクッリしてしまった。

「今から、言うことは事実です！よく聞いてください！斉藤隆二さん、斉藤恵実さん！」

「はい……」「」

「斉藤 藍那。旧姓は、垣ノ内。斉藤隆二の妻、斉藤恵実の母。」

斉藤藍那は、恵実さんを産んだ後、体調が悪化。もともと、心臓のほうが少し悪かったから、だからだと思う。

体調の悪い妻を隆二さんは必死に看病した。隆二さんは朝から昼は必死に働き、夜は藍那さんの看病。そして、恵実さんが、27の時、大阪府の知事に立候補して、絶対に何をしても知事なってやる！と思ったことでしょう。

なぜかという知事は給料がいい。生活に不自由しなくなる。恵実さんは知らなかっただろうけど、斉藤家の家計は、火の車だった。

『え？そんな訳無い！』と思ったでしょ？恵実さん？

隆二さんは、火の車も家計を隠すために、恵実さんにこんな現状を見せないために、たくさん借金してた。そして、その借金を自己破産してから、知事に立候補。当選するはずだった。計画のおかげで

計画どおりにいけば。しかし、恵実さんが取材で事実を知り、取り乱した隆二さんは、暴力を振るってしまった。よって裁判になり、斉藤恵実の勝利。斉藤隆二は刑務所暮らしとなった！以上！……はあ。……はあ。」

喋り終えた戸辺さんは、息切れをしていた。一気に喋って疲れたらしい。私は、聞いた。今、言ったことは？と。

「今言ったことはすべて事……」

「事実！……わたしが……独自に調べた！……はあ。」

「そうですね。」

「恵実。悪かった。俺が悪かった。すまない。」

父は、私に頭を下げた。

「私は、あなたを許さない！……でも、戸辺さんには感謝します。全て分かってよかったです。」

「……そう。……はあ。」

「……戸辺さん。大丈夫ですか？」

「一気に喋って息、切れたんじゃない！……」

「そうですね。」逆ギレしなくても……。

「……ぷつ。」

こんなやり取りをしていたら、面会室の端にいた警察官の人が笑った。

「……戸辺 怜さんは、毎日ここに来ていろいろ、斉藤隆二さんに聞いてましたよ。なかなか言わない時は、なんとしてでも言わず……！って勢いで。そして、ここに23回目に来た時、1週間前かなあ？全てを知った戸辺さんは、「自分で言ったらどうですか？」と斉藤隆二さんに言っていました。でも「言えない。」と斉藤さんが言ったんで、今日、言っただと思えます。戸辺 怜さんは。」

「23回も来たんですか？」

「はい。私が見たかぎりでは。今日は24回目だと思います。記録が残ってます。思わず、この光景を見て、会話を聞いた私としては、

言っておいた方がいいかなと。」

「でも、それ言って大丈夫なの？警官さん？はあ。」

「いえ。言ったらまずいです。警官はこういうこと言っちゃいけないんですけど、思わず…。」

「大丈夫よ。言わないから。はあー。直った。息切れ！」

「ありがとうございます。」

「いいえ。言うほどのことじゃないし。騒ぎ起こしたくないし。」

「戸辺さん。私、頑張ります。もう、意地張りません。心に誰も入れないなんて言ってもらえません！そしたら、誰の心にも入れないですし！感動がなくなっちゃいます！」

「そう！頑張りなさい！でも、仕事のスキルは今のままでいいのよ！それだけは戻さないで！」

「はい。」

「すみません。面会時間終了です。」

「はい。」

こうして、私たちは、面会室を出た。

「さあ、原稿を書きなさい！編集長命令！企画書バツシだったわよー！」

「はい。」

全て解決したとは、言えない。でも私は、これで明るい未来に一步、近づいた気がした。

**第14話（斉藤恵実が見たもの）（後書き）**

次回、最終話です！

## 最終話（私のスタイル）

あれから6ヶ月。

私は小説本を出した。

『家庭内戦争』

私のしたこと、父の事をかいた本である。売れ上げは好調。今日は私のサイン会だ。

「斉藤先生！衣装に着替えてください！」

「はい！」

私は急いで着替えをした。

とうとうここまで来たか。私のやったことが、当たってるか間違ってるかなんて、誰もわからない。この本を出版した時、賛成の人が大半だったか、反対の人もいた。

もちろん、それは読者も同じだった。でも、今は反響が出てきて、こうして私のサイン会まで行われるようになった。すこし一安心だ。

トントン。

戸をたたく音がした。

「戸辺よ！斉藤ー！居る？入っていい？」

「どうぞ！」

ガチャ。

「おじゃまします。」

「戸辺さん！」

「頑張んなさい！」

「はい！」

「じゃあ、帰る！」

「それだけ言いに来たんですか！？」

「そう！」

「そうですか。」

「ちよつと顔見たかっただけ。仕事あるし。」

「そうですか。じゃあ、頑張ります。」

「うん。じゃーバイバイ。」

こうして戸辺さんは帰っていった。

サイン会が始まったので会場に入った。中には、人がいっぱい居た。

「大変でしたでしょう。頑張ってください！先生！」

「はい。」

「ファンですー！頑張ってください！」

「はい。」

といった感じで、いろんな人にサインをした。終わったところには、手が疲れていた。サイン会が終わった時、少し私はホッとした。いろんな意味で。

これからもいいものを書いていきたい。

ジャーナリストとして。人として。自分という人間として。それが私のスタイルだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2154b/>

---

家庭内戦争

2010年11月27日06時35分発行